
戦闘機人TYPE1st

リュウジ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

戦闘機人TYPE1st

【NZコード】

N6910Z

【作者名】

リュウジ

【あらすじ】

小学4年生ながらも少なからず自分の人生を投げ出していた斬空
無人。^{きそらむひと。}

いきなり重症をおつた彼を助けた科学者がいた

人間じゃなくなつた日（前書き）

初めましてリュウジです。 気長に小説を更新していきたいと思いま
す（暗に亀更新）

こんな作者と小説ですがよろしくお願ひします

人間じゃなくなつた日

先生「そんじや 来週になりたい職業、夢の作文書くから考えとけよ
ー」

生徒「はーい」

無『…………。』

小学4年生も終わりに近づいた冬下がり

人当たりが良くて評判の担任が将来 - - つまり未来に自分がなりたい、したいことの作文を考えておけと言つた

大抵の生徒は小学生らしく憧れや希望を少なからず持つていて、早速明るい将来のことについてどんなことを書こうか曇りない笑顔で話し合つている。

そんな中で一人だけ浮いた子供がいた。その生徒の名前は斬空きそう 無むひととい、小学4年生とは思えないほど自分に出来ないことのほうが出来ることより多いことを知つていた

『…………はつ、将来かあ』

そんな未来のことを今聞かれても困るんだよな

そもそも仮に将来の夢が決まっていたとしてもなんでわざわざ作文

『して周りに知らせなきゃならないんだ

「無人、お前ヤ、将来何になりたいんだ？俺は警察官になつて悪い奴を倒してやるんだ！」

『……まだ決まってない。光多、警察官は逮捕が仕事であつて倒すのはひよつと違つた？』

光多がなりたいのは警察官じゃなくて正義のヒーローじゃないのか？でも満面の笑みで夢を語る光多を見ると自然と晴れた気分になつてくる

光多「なら俺と一緒に警察官田指^{たす}しーんで逮捕しまくら^せ」

『あー……誘つてくれるのは嬉しいんだけど、やつぱりまだ考えたいんだ。だからいめんな』

光多「ちえー……まあ、無理ゆづ氣もなにけど」

『ははつありがとな。じゃあ俺帰るよ』

口を尖んがらせる光多におもわず苦笑してしまつた

光多「じゃあな～！」

俺は帰りながらじぶんな嘘で作文を書いつか考えていた

『…………警察官はないな』

光多には悪いけど警察は綺麗な職業じゃない。いや、警察官だけじゃなくて大半の職業は裏で汚職する人間や自由がきかず、ロボットのような変わらない毎日を送るだけだと思う。今までを変えられない毎日に退屈しているのに

俺はそんなのは嫌だ。
せめて自分のやりたいようにしたい

決まらない思考を一旦切り上げて俺は憂鬱で空を見上げた

はあ？

え? なんだあ?

がつ
い、
！？？！？

何が起こった！？

『あ、ああああああああ！－！－！－！』

全身を血みどろにしても痛みがこなかつた無人の体はやつと追いつ

いた痛覚が容赦なく無人に生き地獄を味わせる

無人はいくら大人びっていても小学生4年生だ。大人でさえ耐え切れ
ない傷と痛みに抵抗できるはずもなかつた

ふいに、ぼやけていた視界が影で真つ暗になつた

『…………？』

……なんで目を開けているのにいきなり暗くなつたんだ？死ぬ寸
前だから？

『…………はっ、なんだ俺…………結構余裕だな、俺はまだ自分が正常
な思考を保ててていることに笑つた。普通は痛みで発狂するんじゃな
いか？死ぬ時に冷静になるつていうのは本当なんだなと思いつながら
自分を嘲笑う

「おや、生きているとは。しかしこれは酷い姿だね」

影が喋つた？いや、喋っているのは人間で間違いない。しかも今
俺を見て冷静ということは一般の人間じゃないな

「君に問おう。君は生きたいかい？最も、生きたいなら人間じゃな
くなるがね」

『…………生きたい』

…………最後に聞こえたのは高笑いだった

半分機械になつた日

『……なにこれ?』

眼が覚めた瞬間に違和感があつた

何か機械のような物でほほ全身が包まれてる?

……分かることは結局昨日俺が死なかつたことだけか

「おや、眼が覚めたようだね。私の最新の技術を用いて作った体なんだがなにか不備はあるかい?」

『えつと、不備はないです。若干の違和感と頭に響く機械音が少し気になるだけです』

本当によく出来てる体だと思つ

「ふむ、左目は見えているようだね」

『左目?』

「ああ、気づいていなかつたか。左目は負傷が大き過ぎて機械に替えさせてもらつたよ。どうだい? 素晴らしい視力とクリアな視界だろ? づー?』

『わあつ! 興奮しないで下さいよ!』

それにして……まあ、興奮しているのも怖いんだけど、それ以上に左目が違和感なさすぎて気づかなかつた

どこの技術だろ？少なくとも日本じゃ有り得ない

意識してみると左目からキューインっていう機械の音がした。多分中でモノアイやらカメラやらが動いているんだと思」

「しかもただ視力が良くなっただけではない……」

『またですか！…』

「その左目には戦闘機人システムの一つ、IS^{インヒューレントスキル}が備わっているのだよ！」

『な、なんだってー！』

いや、雰囲気でだいたいの意味は分かるけど専門用語ばかりいわれたら困る。ちゃんとした意味が分からぬ

「…………そんなあからさまに棒読みで驚かれると流石に傷付くんだがね。私も熱くなっていたようだ、まず君には現状を知らせないといけないというのに」

『助かります』

ジェイル「私の名前はジェイル・スカリエット・ティといつま、科学者だよ」

「マッドサイエンティストですね、分かります

『俺は斬空 無人です。ジェイさんって呼んでいいですか?』

ジェイル「構わないよ。さて、無人君。無人君は晴れて名前と同じように人では無くなつたんだが『余計なおせわです』失礼。なら君がもう人間に混じつて生活出来ないことは分かるかい?』

『分かりますよ。もし俺の正体がばれたら化け物扱いされるかジェイさんのようなマッドな人に一生研究されて改造される地獄を味わうだけでしよう?』

ジェイル「……私はマッドではないんだがね『マッド中のマッドですか?』……まあ、確かに人には違法と呼ばれる研究ばかりしているがね。それより、君は頭が良いみたいだね。こんな状況になつても臨機応変にかつ柔軟に思考出来る者はなかなかいない。端的に言つと私の口から説明する必要はないのだよ」

『なんですか?』

ジェイル「君のブレイン補助データチップ、君のもう一つの脳のような物に必要なデータを入れておいたからだよ。ふむ、物は試しだ、データを引き出すように思考してみると」

『……それはまた凄い技術ですね。脳と機械がリンクしているってことですか?』

ジェイル「ふはははははー!実に助かるよ!説明の手間が省けていい。もつと詳しくいうなら君の脳から発信するマイクロ脳波と電気信号がデータチップに受信、もしくはデータチップから発信するのだよ

「へーますます凄い／＼ピー、システムオールグリーン。確認中……、
以上なし。今からデータの引き出しをします」

『うわあつー！俺の肩？から機械音がでた！？』

ジェイル「君の肩には簡単にいつとアダプターがついていてね、そこからコードを繋げたりするんだが、必然的に肩からデータ分析の状況が発声されるようになつていてるのだよ。どうだい？必要なデータは引き出せたかね？」

『ええ、全部分かりました。俺は戦闘機人とよばれるプロジェクトFの次の段階のプロジェクトで初めて人間から作られた成功体、戦闘機人TYPE1st。ジェイさんは次元管理局？に顎で使われているつてどこですか』

ジェイさんも苦労しているんだな。結局違法だけど

ジェイル「合つているよ。まあ、すぐに抜け出すんだがね。それにしても驚かないのかい？」

『驚いてますよ。ただ俺の機械の部分が正常に動いているだけです』

ジェイル「それは良かつた。さて、無人君には私の助手をしてもらいたいんだがね。君のチェックもしなければならないし、機材の揃つたこの部屋を自分の部屋にしてくれたまえ」

『分かりました』

暫くは退屈しなさそうだな。……世間からどれだけ生命の冒涜だと悪だとか言わされることをするとしても

N.O・Iが出来るまでの日

『それでジョイさん。俺はビジウムって手伝えばいいんですか? まさか俺とジョイさんだけで研究開発するわけじゃないですか?』

ジェイル「勿論、私の他に各専門分野のエキスパートの研究員がいるよ」

『良かった。ここでジョイさんが一人でやるとかいだしたら夜逃げするところですよ』

ジェイル「安心したまえ。私がチーフをしているが部下も優秀だ。ただ困ったことに上のスポンサーが馬鹿ばかりなのだがね」

あ~それは分かる。データの情報でも管理局は俺達正義(笑)の集まりだったしな

『例えどんのですか?』

ジェイル「まあ、待ちたまえ。管理局の無能さを知らしめるにはとびっきりのネタがあつてね。

無人君、何で君が死んだか分かるかい?」

あれ? そういうえば分からないな……上を見上げたら閃光? が光つたように見えただけだもんな

ジョイさんが凄いにやにやしてるので俺つてそんなにあほな死に方だったのか?

『やついえば気になりますね。俺の死因って一体なんなんですか?』

ジェイル「君の死因…………それは……」

『…………』

ジェイル「私を上空から撃とつとした管理局魔導師の誤射なのだよ
…………」

『…………はあ?え、ちょ、俺の耳が壊れたんですかね?もう一回
いつて下さい』

ペー、確認中……聴覚、鼓膜、その他の機能に問題なし。正常で
す>

ちょ、ひるせいな俺の肩

『あれですか?ジョイさんを上空からあほみたいに遠距離で狙つた
屑魔導師のとばっちりをつけて俺死んだんですか?しかも非殺傷設
定もなしですか』

ジェイル「全くもつてあひつての方向に放たれた一撃だったが多分
間違いないと思つむ」

『俺、今から管理局壊してきていいですか?フリーかジョイさんも俺
の死因の一部じゃねーか』

ジェイル「安心したまえ無人君。仇は私が討つた!!」

『ドヤ顔で親指立てるな元凶!』

ジエイル「それはハツ当たりというものがはあつー！」

俺の戦闘機人版右ストレートがジエイさんの右頬を捉えた

~~~~~

さて、スッキリしたところで話しを戻しましょうか』

ジエイル「ちよつと待つてくれないかね。メガネが壊れたから予備をかけたいのだよ」

なんか自然に壊れましたもんね、メガネ

ジエイリーいや、壊したのは君なんだが……」

『それで、結局どんな戦闘機人造ればいいんです?』

ジユイさんがなんかいつてるけど知らん

造るにしても用途があるはずだからな。例えば量産できる有能な人員が欲しいとか、初期スペックがチートで更に成長していくとか

ジエイル「ふむ、研究コンセプトはく高位魔導師を倒せる性能を持つたサイボーグ♪だよ」

『成る程、なら魔力AAは必要ですね。擬似リンクアーカイブは作れる

んですか?』

ジェイル「ふむ、その点は問題ないのだがね、問題は機械の性能に生身の肉体が耐えられないことだよ」

『走った瞬間に皮膚がちぎれるってことですか。……怖いですね、俺その光景絶対見たくないですよ』

ジェイル「そうならないために今案を出しているのだよ。今から私の研究班のところに行くから着いてきたまえ」

『えー……ジョイさんみたいなマッドが沢山いるところなんて行きたくないですよ。一人でいって下さい』

寄つてたかつて解体されるなんて嫌すぎる

ジェイル「……君も言葉に遠慮しなくなってきたね。万が一無人君をバラそっとする輩がいたら私がそいつをバラしてあげるよ」

『ジョイさん…………』

初めてジョイがかっこよく見えた。俺をそんなに大事に思ってくれていたなんて……

ジェイル「無人君は私の大事な作品だからね」

『大事の意味が違う……』

ジェイル「ああっ、暴力はやめたまえ!君の腕力は戦闘機人になつて大分強ぶはつ……!」

俺の右拳が一度田の唸りをあげた

~~~~~

『いやーそれにしても廊下長いですねジェイさん』

わっわからずつと一人の足音が廊下にかつーんかつーんと響いてる

ジェイル「まさかたつた30分の間にメガネが一個も壊れるとはね
…………もうメガネじゃなくてコンタクトにするよ」

『物は大事にしないといけませんよ?全く、いい大人のくせに……』

…

ジェイル「だから壊したのは君なのだがね…………もうすぐ着くよ」

ああ、あの扉か

◀HIDカード確認しました▶

なんかいかにも厳重そうな扉を開けた

ジェイル「ふはははは…見たまえよ無人君、よつ」そ、私の城(

研究室)へ…」

『ちよ、ジョイさんつるさいですよ』

そんな大声だしたら他の研究員に迷惑が……

研究員「…………」

『うわあ、仮にもチーフが来たのに見向きもしませんよ』

こんな痛い人が来たのに無視なんてただ者じゃないな

ジョエイル「仮ではないんだがね。科学者とはそんなものなのだよ

ジョエイル・ス仮エッティ…………あんまよくないな

研究員「ドクター、後ろの少年はどうしたんです?モルモット(実験動物)ですか?」

さうりと恐いこといつたよこの研究員!?

ジョエイル「ふ、ふははははははは!…諸君!驚きたまえ!…」(ここにいる斬空 無人君は昨日、人間から戦闘機になつたのだよ!…)

研究員「「なん…………だと!…」」

『ノリいいあんたら』

研究員「つまり過程は違えどセイの子供がこの戦闘機人の完成形なのか……」

女性研究員「いや、それだけじゃないわよ！
無人君はもう成長しない…………つまり……！」

『つまり？』

女性研究員「つまりエターナルショタなのよ……」

女性研究員「「はつづ……！」」

『いや、はつづじゃねーよ……』

そういうえば俺もう成長しないのか…………一生10歳児体型とか泣ける

女性研究員「素晴らしい…………素晴らしい過ぎるわ。永遠に愛でる」との出来る男の子…………私はこれを求めてたのよ……」

『あんたら戦闘機人の研究してたんだよな！？』

つーか田つき恐いんだけど！？

ジエイル「あー諸君、無人君を愛でるのは後にしてくれたまえ『一生愛でんでいいわ！』無人君は高速移動などの戦闘は出来ない。やはり生身だと限界があるのでよ」

研究員「…………」

今更キリッとした顔になつても第一印象のせいで台なしだな
しかも全員が机に肘ついてシ○ジ君のお父さんみたいだからシュー
ルすぎる

ジェイル「私たちは一つの細胞から素体を作らねばならない。この段階はプロジェクトFとなんら変わらない。しかし、問題は機械のチューンナップなのだよ。確かに機械装甲の部分を強く、軽くすれば大抵の攻撃には傷つかずにすむだろう。しかし、このままでは生身が機械に耐え切れずに魔力に頼るだけの戦闘機人を造ることしか出来ない」

研究員「もういつそのこと全身を機械にしてしまえばいいのでは？」

研究員「「それだ！..」」

『それだ！！じゃねーよ！つーかお前ら手に持つてるフィギュアはなんだ！ロボット造りたいだけだろ！』

ジェイル「それが一番手っ取り早いのだがね、スポンサーはあくまでも半人半機を所望しているのだよ」

オタ研究員「「そ、そんな！我々の〇・T・フィールド計画が！」」

『この世界にもガンダ〇とか〇ヴァあんの！？』

ジェイル「A・O・フィールドがなにかは知らないが対魔力フィールドは可だよ」

A・T・フィールドは誰にも侵されたくない心の領域ですよジョイさん

そもそもあのフィールドは魔力も防げるのか不思議なんだけど……
…ああ、こここの連中なら普通に魔改造したA・T・フィールド造れ
そうだな……

ジョエイル「なんで遠い田をしているのだね無人君。君の意見を聞きたいのだが」

『どーせ魔力AA以上の造るんだから魔力で肉体を強化する機関を造ればいいんじゃないですか?』

ジョエイル「…………」

研究員「…………」

え?なんで皆ぽかーんとして俺を見てんの?俺なんかした?

ジョエイル「…………ふ、ふふふふふ!…!」

『うわつ、不気味すぎる』

しかも無駄に右手で顔を隠してるからナルシストっぽいですよジョイさん。悪逆皇帝にでも田覚めたのか?

ジョエイル「ふ、ふふ、ふはははははははははははははははははははははははははははははは!…!そうだ!それだよ無人君!…何故それを思

いつかなかつたのだろうね！！こここの研究員達は！自動で付与魔法をかける機関を造ればいいのだ！！

なにさりげなく自分は違うみたいな雰囲気だしてんのこの人？

とりあえず高笑いが止まりそうにないジョイさんはほつといて真面目な研究員の人と話すことにしよう

研究員「後は戦闘機人に適した遺伝子と受精卵が必要ですね」

『培養液の中でどれだけ人間の形を作れて戦闘機人化にも適合できるようにしなければならないですからね』

ただ何兆を越える遺伝子から適合する遺伝子を見つけるのに何年かかるか…………考えたくないな

研究員「クローリンを作るわけにはいきませんが、プロジェクトFA TEの記憶の複製転写技術で赤子の脳シナプスネットワーク（誕生二ヶ月前から二歳程度までにある）に干渉し、特定の人物の記憶を素体に転写して生まれた瞬間に自立可能にしなければいけませんね」

『教える時間がもつたいないですからね』

……やっぱり成功体完成までに3年はかかるんじゃないかな？

まあ、そんなこんなで高笑いするジェイさんをほつといて優秀なスタッフ達と研究に勤しんだ

（閑話）

オタ研究員「武装にファン○ルをつけていいかな？」

『却下！』

女性研究員「はあはあ……無人君、ちょっとこっちに来てくれない？怖くないから」

『うわああああ！』

N.O・Iが出来るまでの日（笑）

この間、問題は解決したかと思われていた戦闘機人開発プロジェクトだが、俺は思わぬ落とし穴を発見してしまった

その問題を発見したとき俺は少なからず『は？』『この研究員って人間止めてんですか？時間がないとか言い訳ですよコノヤロー、いい大人が数十人も集まってるくせに何してんの？』と思った

今日、俺はそのことについて議会すべく長い机の座っている。一番奥が俺、俺の右斜め前がチーフのジェイさん。左斜め前は優秀で真面目だと思っていたらチーフ補佐だった人。並び方は奥が偉い人、手前から下つ端というよくあるパターンだ

勿論、皆碇パパの格好（机に両膝ついて顔の前で手組）

『全員揃いましたか？それでは会議を始めます。なにか異論はありますか？』

俺の発言に皆さん沈黙したまま動じない

『ないようですね。それでは副チーフ「ちょっと待ちたまえ」……なんですかジェイルチーフ、異論は無かつたのでは？』

俺が副チーフに話しかけようとしたらジェイルチーフから待つたがかかった。異論があるんならさつき言えよ空氣よ……げふんげふん

ジェイルチーフの手組を解いて現れた顔は今だかつて見たことない困惑した顔だ

ジェイル「……そもそもこんな下らない『下らなくはありません。重要です、ジェイルチーフは』との重大さが分かつてないみたいですね』……さつきから気になっていたんだがそのジェイルチーフといつ呼び方はなんだい？」

……はあ、まさかそんなことも分かつていなかつたなんて

そんなの決まつてゐだろ

『ノリですよノリ』

ジェイル「……無人k『』では議長と呼ぶよつに『……無ひ『議長と呼ぶよつに』……議長』

『なんですかジェイルチーフ、発言を認めます』

ジェイル「研究に戻つ『ふざけんな』！？」

『はあ……ジェイルチーフは議会での進行を妨げるのでこれから一切の発言権を許しません。では副チーフ、今回の議題を』

副チーフ「はつ！」

副チーフがスクリーンに投影する

そしてそこに書かれた文字が今回の議題だ

『よひしい、では』れより、【「」飯は一日三食しつかつとひつ】を始めます』

まるで子供が書いたかのような可愛らしい文体がなんとも場を和ませる

ジェイル「君達もしかしなくとも真面目にする気ないだろ?」

副チーフ「ひゅーひゅーイエーイ、ドンダーン」

ジェイル「……副チーフ……」

なぜかジェイルチーフが副チーフを見る目は生暖かい、別人を見るような目になってしまった

そう、眞面目だった彼はもういない

それはさておき……

『一切の発言は許さないと書ったはずだわ』

副チーフ「歯あ食いしばれー」

スパーク

ジェイル「なぜハリセンなんだね?歯を食いしばる必要がないのだ
が

副チーフ「喋らないで下さいねー」

笑いながら軽やかに言う副チーフの右手にはエクスカリバーと彫られたバット

『回数に比例して段々強くなります』

ジェイル「そういうのはもつと早イタいつ……」

副チーフのエクスカリバーがジェイルチーフをそれなりに強打した

叩かれたジェイルチーフは眞面目に痛そうだ

ジェイル「…………」

『さて、ジェイルチーフが黙った所で話を進めましょう。それでは副チーフ、今日、ジェイルチーフが僕に「夕食だ。しつかり栄養を補給したまえ」といつて手渡した物をこちらへ』

副チーフ「はつ…どうぞ」

そういうつて副チーフが机に置いたのはサプリメントとフリスク

『違うだろ！…おかしいだろ！…ばつかじやねーの…?どこに夜ご飯がサブリメントとフリスクの家庭があるんですか！？そんな家悲し過ぎるわ！せめてカップ麺にしろよ！…!つーかなんでフリスク！…!」うちに至っては栄養薬品ですかねーよ…。』

ぱしーん！！

手に持っていたフリスクを机に叩きつけた

ジエイル「…………」

『なんか言つて下さーい。』

ジエイル「『ふうつ…えええ！？私に発言権はなかつたのではないかね！？副チーフ！金属はやめたまえ！金属は！…』

副チーフは残念そうに一発入魂と云うペナントが貼られた金属バットを下ろした…………と思つたら素振りしだした

俺つて取り返しのつかない」としたんじゃ？

『まあ、副チーフはおいといひ。ジエイルさん、もつ牒つていいですよ。』

ジエイル「議長の『俺の名前は無人です』……無人君の言い分は分かつた。だがね、食事とはただ栄養補給が出来ればいいのだよ。味は副産物に過ぎない」

『…………ジエイルさん、コーヒーはブラックを飲んでますよね?』

「それがどうかしたのかい?」

『栄養補給とかいつて糖分摂取してないじゃですか!味は副産物?ふざけるのも大概にして下さい!!結局味優先じゃないですか!!このマダオ!!【マッドで駄目でオレンジ野郎の略】食欲は人間の三大欲求なんですよ?味がいいほつが満足するでしょう』

ジエイル「…………しかしだね、ここにいる全員が料理出来ないのだよ」

『…………は?』

え?女性も結構いるのに?
いやいやいや流石にそれはおかしいでしょ

『副チーフ、本当ですか?嘘だったら潰しますよ?ジエイルさんを』

副チーフ「嘘じゃないです」

『本当に?』

副チーフ「本当にです」

『マジで?』

副チーフ「マジです」

『ガチ「現実は受け止めるものだよ無人君」』

目の前に視線を向けると机に座つてゐる全員が碇ボーズのまま頷かれた
……ええ～～。そんな息ぴったりに頷かれても困るんだけど

『十人以上』いるのに誰も料理出来ないなんて無能もいーとこじゃな
いですか（全く、仕方ないです）』

ジェイル「本音と建前が逆だよ」

『…………はあ、分かりました。食事は全部俺が作りますから最低一
日一色は食べて下さい。もし生まれてくる子（戦闘機人）達にそん
な食生活させたらぶん殴りますからね？』

ジェイル「そんな物騒なことを私を見て言わないでくれないか

副チーフ「…………そうですね、サンドイッチなどの軽食なら手間がか
からずに入れるんじやないです？」

『だそうですよ？』

ジェイル「…………はあ、分かったよ。研究の効率が下がるのは頂けな
いが無人君の想いを無下にするのもなんだからね」

ジェイルさんは降参とでも云ひつつに肩をすくませてゐる

『本当にですか？もし食べなかつたり口に挿込みますよ。』

ジヨイユ「……感動する場面なんだがね。…………やんと食べると」

……その間はなんですか

その次の日に服や風呂に入る回数などの議会が行われるのは余談である

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6910z/>

戦闘機人TYPE1st

2011年12月25日21時50分発行